よい教育で よい研究を

三木安正

よい教育をするためにはよい研究に基かなければならないが、そのよい研究はどこに求められるのだろうか。

このことは、わかりきつたことのように思われるかもしれないが、実は、よく考えてみる必要があると思う。

戦争前も、戦争後も保育関係の講習会というと実によく会員が集る。これは一体、よろこぶべきことなのか、それともかなしむべきことなのか。

講演などをたのまれるとき「なるべく具体的にお話しをねがいます」といわれる。ところが、たのまれる方は、子供を具体的に扱つている人ではなく、西洋の本などを読んで勉強している人なのである。

教育関係の講演会に行くと閉会の辞の中で、大てい、「……本日はたいへん有益なお話をうかがいまして……うんぬんとあつて……これを明日からの教育実践に役立てたいと思います」といつた言葉がのべられる。学者の話したことが、そのまま明日からの実践に役立つのだろうか。

このようなことに、わたくしはいつもチグハグな感じをいだかされる。

それから、もつともつたいないと思うことは、教育の実践に当つておられる先生方の「研究」というものが、いたずらに紙の上の調査をやつたり、テストをやつたりして、統計的な数字をならべるだけで、教育の実践とは何等必然的なつながりがないものが多いことである。

このようなことを通じて考えられることは、教育実践と教育研究とがはなればなれになつてしまつているということである。すでにずつと以前から、教育の研究は教育の現場から握み出された研究でなければならないというようなことは、ずい分さけばれていた。けれども、そのような論に応ずるような研究成果はあまり出てきていないようである。それは要するに、現場から問題をつかみ出さなければならないと論ずる人自身が一向現場に入つて行かずに、そういう議論だけしているから

かもしれない。

現場の人は、その教員達成の課程で研究ということの訓練をうけてこなかつた人も多いので、「研究」ということはたいへんむずかしいこと、いかめしいことと思いこんでいたり、ことに「研究」ということは「教育の実践」ということよりはるかに高級な仕事だといつた迷信をもつているために自分たちの手のとどかないところにあることと思いこんでしまつているのではないかと思われるふしがある。

学者先生は口先きだけで手を出さないし、先生方は手も足も出ないようになつているのか「研究」ということではないだろうか。

お医者さんのすることは、よほどの藪でないかぎり、診断とか治療とかいうことと研究ということは一体になつている。生理学者とか薬理学者というような人は専らいわゆる研究に当つている人だが、これはもうお医者さんではない。教育という仕事も、医学の仕事と同様に考えられるのだが、教育の分野では教育学者といえば、すべて医学における生理学、病理学という、いわゆる基礎医学にあたるような方面の学者ばかりで、臨床医学者に相当するような教育研究者がはなはだ少い。医学部に行けば内科、外科、小児科等々、沢山の臨床部門があり、それにくらべれば生理解剖などは少数の専門研究者がいるにすぎないが、教育学の方では生理、解剖ばかりで臨床の方は少数、内科と外科との区別もないといつた工合である。

臨床医学の部門では、どんな大家も生涯にわたつて患者をみて、その学術をみがいているのだが、教育学者で実際に子供を扱う人はほとんどいない。

むろん、医学の仕事と教育の仕事とは全く同じに論ずるわけにはいかないが、教育の実際家たる先生方が「具体的なお話を……」などとたのみに行ける教育学者は臨床教育学者でなければならないはずなのであるが、実際はそうした臨床教育学者といえるような人は、ほとんど存在しないのである。

これが臨床医学にも比すべき教育の実践的研究の発達しない原因であろうと思う。

医学の修業をする大学の医学部には附属病院があつて、臨床各科の教授はみなそれぞれの科の病室を主宰している。附属病院をはなれた医学の修業などはあり得ないのである。これに対して教員を養成する大学には附属学校があるけれども大学の方と附属の方とは全然はなればなれになつてしまつている。学生は卒業までに数週間附属学校に実習に行くにすぎない。そして大学の教授は附属学校の教官よりも偉そうな顔をしているのできる。本当ならば、各教科の教学習指導法などを担任する教授は、附属学校（とはかぎらないが）の教諭の中から研究をつんだ人がなるべきなのだが、そうしたことはあ

まり行われない。つまり教員養成の方には内科も外科も分化してないわけである。

のみならず、教育の実際にあたっている先生方は、学者というと何でも知っている偉い人のように迷信している。そして、自分たちの毎日の教育実践をつまらぬことのように思ってしまっている。これは教育の進展にとって最も恐ろしいことだと思う。

そういう意味では、講習会がはんじようすることは決してよろこばしいことではない。

実際経験をもたない学者に指導の具体的方法をきくなどということは全くおかしいことだ。

本来、学者は一般的法則を求めようとするものであるから個別のものを抽象化し一般化しようとする教育の実際家は、その一般法則をわきまえていて、これを個別の子供たちにあてはめる。これが両者の考え方のすじの云ちがいであるが、一般化と個別化とはそう一本の筋で簡単にむすびつけられるものではない。そうしたことが出来るようになるには、やはり、自分で子どもたちの行動の中から問題がみつけられるようにならなければならない。

学者にお話をきけば、解決できる妙法があるというものではない。

医者においては、ある症候を示す患者に最もよいと考えられるか療法を試みてみる。それが成功すれば、他の同様な症候を示す患者に次々とその療法を試みてみる。そして症候にある療法が利くということになってから、それはどうして利くのだろうかということが研究され、病理学とか薬理学とかいう分野での学者の研究で、その関係が明らかになれば、その病気の治療法が確立するわけである。つまり問題を発見するのは臨床部門で問題も解決するのが基礎部門となるが、これは相互に仂き合ったり、一人で臨床と基礎とを兼ねる場合もある。

これに対して教育の分野では臨床の方がさっぱり自信をもった活動をせずに、基礎の方にすべてを依存しているようなかっこうである。これでは進歩を望むことは出来ない。

研究とは、まず何とかして解決しなければならないと考える問題をもち、それに対して考えられるだけの仮説を立てそれにもとづいて具体的な対策をたてて実践し、その結果（反応）によって前に立てた仮説を検討するということを繰返して行くことであって単にテストをして数をならべるということではない。それ故に教育の研究は教育の実践を通してでなくては出来ないことなので、よい研究はよい教育からしか生れないということを強調したいのである。